

富永神社祭礼奉納

と き 平成二十三年十月七日(金)
午後四時四十五分始
と ころ 富永神社能楽殿

能

組

仕舞 西王母 榎本奈月
呉服 榎本美月

仕舞 狸々 長田悠那
芦刈 川村美幸

小舞 津の国 加藤久和
宇治の晒 小澤貞博
道明寺 水谷至男

狂言 口真似 太郎冠者 権田大悟

主人 加藤颯汰
客 河合健多

後見 天野雅夫

5:20分頃

仕舞 卷絹 鳥居久仁子
藤戸 本田洋子
三井寺 岩崎葉子

仕舞 絃上 渡辺敏康
養老 桜本泰朗

独調 鐘ノ段 高林白牛口二

今岡アイ子

5:50分頃

狂言 雁大名 大名清川松佐

太郎冠者 山本勝
雁屋 酒井淑規

後見 水谷至男

休憩

仕舞 玉昭君 加藤晃
玉葛 村田昂平
今泉尚美

6:55分頃

能
船弁慶

子方 杉野 莉子
シテ 今泉 英三

ワキ 長田 共永
フキ 渡辺 敏康
間 佐野 泰三

大鼓 清水 利高
小鼓 森田 收
太鼓 鈴木 崇史
箏 大野 誠

後見 佐藤 陽
太田 康弘

地謡 太田 研司
竹内 声位 晤
桜本 泰朗
高林 白牛 口二
中嶋 康夫

8:10分頃

狂言
因幡堂

男 天野 雅夫
女 加藤 久和

後見 加藤 賢一

シテ 杉浦 史佳

能
狸

ワキ

桜本 泰朗

大鼓 河村 総一郎
小鼓 小林 寿枝
太鼓 中嶋 康夫
今泉 英三

後見 太田 康弘

地謡 鈴木 崇史
清水 利高
太田 研司
長田 共永
渡辺 敏康
森田 收
高林 白牛 口二
高林 呻二
佐藤 陽
竹内 声位 晤

8:35分頃

(終了予定 九時頃)

主催 本町区

狂言 口真似くちまね

主に酒の相手を捜して来いと言われた太郎冠者が男を連れ帰るが、主が酒癖が悪い人をなせ連れてきたと叱る。仕方ないので太郎冠者に、「身共の言う様、する様にせい」と命じる。太郎冠者は、本当に主の言動通りに行動する（叩かれたら、客を叩く等）ので、話が段々と脱線していく。怒った主は、太郎冠者を投げ捨て、客に一礼して、その場を立つ。起きあがった太郎冠者は、客を投げ捨て、同じく恭しく一礼して、その場を出ていく。

狂言 雁大名がんだいみょう

訴訟かかって都から帰郷することになった人たちへご馳走しようと思ひ、太郎冠者に肴を買ってくるよう命じる。冠者は初雁を見つけて買おうとするが、代金がない。そこで冠者は大名と相談し、作り喧嘩をしてそのどきどきに紛れて雁を取って逃げることを提案する。

雁を示す小道具に、和泉流では大きな羽根または羽箒を用いる（大蔵流では洞烏帽子）。大名は店の亭主に向かつて、「それはなんだ」とか、「がいに高い」などというお国なまりをわざと使う。関東方言を意識しているらしい。大名のせりふにある「妙丹二つに切り割ろう」の「妙丹」とは妙丹柿のことと頭のたとえ。

大蔵流では「雁盗人」といい、明治以降、廃曲となっている。

能 船弁慶ふなべんけい

平家追討に功績をあげた源義経でしたが、頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。義経は、弁慶や従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ到着します。義経の愛妾、静御前も一行に伴って同道していましたが、女の身で困難な道のりをこれ以上すすむことは難しく、弁慶の進言もあり、都に戻ることにしました。別れの宴で、静は舞を舞い、義経の未来を祈り、再会を願いながら、涙にくれて義経を見送ります。

静との別れを惜しみ、出発をためらう義経に、弁慶は強引に船出を命じます。すると、海上に出るや否や、突然暴風に見舞われ、波の上に、壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現しました。なかでも総大将であった平知盛の怨霊は、是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかります。弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈禱します。その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、白波ばかりが残りました。

狂言 因幡堂

妻を離縁した男が、因幡堂に参詣して妻乞いの祈願をする。これを知った妻は腹を立て、参籠中の夫に、「汝が妻は西門に立たせておく」と神の託宣のように告げて西門で待つ。霊夢だと思いい込んだ夫は喜んで連れ帰るが、……。

霊夢によると妻乞いとしては、「釣針」「吹取」など同趣向の狂言がある。どれも被衣を取って仰天する展開だが、それが醜女の故ではなく、妻であったからというのは、むしろ「花子」と共通である。

因幡堂（平等寺）は京都市下京区に現存する。この寺を舞台にした狂言に、「鬼瓦」「仏師」「六地藏」「金津地藏」があり、狂言との深い縁が考えられる。中世、この寺の境内で頻繁に狂言が上演された痕跡が伺える。

能 狸 々

中国の金山の麓に、高風という大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは楊子の市に出て酒を売ると、富貴の身になるといのです。その夢の通りになると、なるほど次第に金持になりました。ところで、市の立つごとに高風の店に来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変わらないので、ある日その名を尋ねると、地中に住む狸々だと明かして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽の江のほとりに出、酒壺を置き、狸々の出てくるのを待つことにします。（ここまでの経過をワキ高風が一入で語り、能はここから始まります）やがて狸々は、葉の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、狸々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。